Yokkaichi Nursing and Medical Care University

四日市看護医療大学

四日市看護医療大学学報 No.3

[発行日]2009年12月20日　[発 行]四日市看護医療大学　庶務課
〒512-8045 三重県四日市市萱生町1200 TEL 059-340-0700 FAX 059-361-1401 http://www.y-nm.ac.jp/

3年目の充実・転換期に入りました

学科長・学生支援センター長　宮﨑　徳子

本学の新しい転換期というべき3年目を迎えました。開学式を迎えたのが、つい昨日のような思いがいたしますが、4月には3回生98名を迎え、総勢336名（3年生129名、2年生110名、1年生97名）、教員数も3年次より開始されます各看護学の専門領域教員が勢ぞろいいたしまして、教授以下非常勤実習講師を含めて43名と大所帯となっております。職員数も学生の増加とともに業務の多彩さも増え、各部署でのそれぞれの精通者を迎えており、大学としての様態が整えられつつあります。

学校行事も入学式に始まり、2年生の海外研修、今年度より四日市大学との共催による大学祭『よんよん祭』は本学バトン部のステージ発表、本学ダンス部四日市大フォークソング部共演のダンスステージ発表、本学内でのお化け屋敷、健康度測定や2年生の軽やかなハロウィンダンス等、地域の方々や学生の御家族、教員の家族の参加と多彩でにぎやかな内容になって楽しい催しとして充実しておりました。

地域活動としては公開講座において6月20日『小児虐待』問題をテーマに鋭く切り込み、鈴木敦子教授により看護の専門性からの社会への提言としての講演があり、多くの市民や看護関係者の参加を得ておりました。三重県生涯学習センター主催の『みえアカデミックセミナー』への参加として7月5日『2時間でわかる少子・高齢化、人口減少社会』での東川薫准教授の問題提起を参加者とともに考える機会をもうけ、身近な問題として提言をしております。開校以来3回目となる産業看護研究センター主催の公開講座においては、地域の知の拠点シンポジウムとして定着しておりますが、今年度は、『ストレス解消に役立つ〝笑い力〟を高めよう』と講師にいやさかネットワーク代表ジェイ神原氏のプラクティスを交えての講演と近藤信子教授による看護学の視点と合わせ、多数の参加者とともに、笑いの底力を体験いたしました。こうした地域との連携による大学としての活動は、3年目を迎えて質的にも充実した活動となってきております。

21年度の大きな進展としては、3年生の各領域別実習が開始されたことがあげられます。3年生128名が4年生前期に及ぶ24週間の臨地実習へと9月7日より入りました。1グループ6名編成で、22グループが一斉に臨地実習を開始いたしました。大学としては、実際の医療や保健、福祉施設の現場の中で、2年と半年間学んできた基礎的な知識・技術・対人関係成立のための技術を活用し、実際の援助の対象者としての家族を含めての患者さんや地域住民の方々に適応できるのか、学生はもとより教育を担当してきた教員としても大きな不安と期待を併せ持つ課題でした。看護は愛と実践の科学といわれるように実践してこそ、その価値が評価されます。このためには、これらの基礎となっているリベラルアーツとしての一般教養での学びとしての人間観や価値観、倫理観、現象への探究心、生命への畏敬が学生の行動の規範として修得されているのかも、大きな課題としてあります。こうした人間としてのあり方は、臨地実習での対象者としての患者・家族、施設等の利用者の生活や健康への希求、QOLのあり方と支援の現状等を専門家の行動や言動の中から、さらに学びを深め、学生自身の価値観を形成していくともいえます。

このためには、臨地実習の施設の方々と大学教員の連携が重要となります。実習に先立ち、臨地実習施設責任者や実習指導担当者との《説明懇談会》の開催や打ち合わせ会を重ねて実習へと移行いたしました。

大学の教育方針と現場との連携により学生はさらに成長を続けながら専門家へと変貌を遂げていくことができます。健康の守り手としての学生の更なる成長を支援し、社会へと旅だつ日を見守り続けたいと思っています。

三重県の北中部地区の健康の守り手の大学として、有能な学生が育ち続けることができるように、皆様からの変わらぬご支援を賜りますよう、衷心よりお願いいたします。

随筆

『マザーグース』と子どもの虐待、そして想像力と…

小児看護学　教授　鈴木　敦子

英国の伝承童謡集『マザーグース童謡集』に、「大きな枝が折れるとき」という唄があります。「木の上の赤ちゃん，おやすみ。／風が吹くと，ゆりかごゆれるよ。／大きな枝がゆれると，ゆりかごゆれるよ／大きな枝が折れると，ゆりかご落ちる／赤ちゃん，ゆりかご，みんな落ちるよ。」というものです。かつて英国で学んでいたとき、指導教授は「この小品は単なる子守歌ではなく，子ども虐待の唄であると想像する力(imagination)が何よりも大切」と、静かに話されたことを、今でも鮮明に覚えています。

彼が求めていたのは、〈大きな枝〉とは《社会》であり、〈ゆりかご〉とは《家庭》であり、〈赤ちゃん〉とは《子ども一般》であり、〈風〉とは当時の社会に吹き荒れていた《貧しさ》であると構想する力でしょう。この力を通して、子ども虐待が関係性の障害であること、加えて貧しさゆえに親たちはわが子を虐待し、社会もそのことを容認してきた「貧困社会型子ども虐待」を正しく判断することができるでしょう。

社会に吹く貧困という風は、もちろん現代でも治まってはいません。第三世界におけるストリート・チルドレンは、まさしく国家規模での貧困による虐待ですし、先進諸国においても貧困はなお子ども虐待の大きな要因です。しかしながら、今日の子どもの虐待が大きな社会問題となっているのは、経済的発展をなし遂げ、子どもの権利を認めている先進国においてです。つまり、この問題の急増化、深刻化の背景には、現在の社会に吹き荒れている〈風〉は《不安》であると構想することができないでしょうか。

子ども虐待への想像力が違えば、当然、働きかけも異なります。中桐雅夫氏は、まさに「想像力」という詩のなかで、想像力の内容を私たちに問いかけています。「人間は二種類に分けることができる／紅白歌合戦を見る人、見ない人／飢えている人、食べ飽きている人／人を殺したことのある人、殺したことのない人／たいていの人は吸い飲みで水を飲んでから死ぬが、その暇もなかった子供たちがいる／向う側の国と、こちら側の国とがある、／向う側に妹や弟がいたら、と想像するのはおかしいか、／肉を食べたことのない子供たちを想像するのはおかしいか、／それほどの想像力も、きみらはもっていないのか／ぼくは自分の小さな手のつまらないしわを眺めながら、／生きているのが恥ずかしくなった。」

想像力は、人間の感性的な能力と知性的な能力とみることができます。つまり、子ども虐待の事実に対応して、他の事物や出来事と区別し、独自の心像を〝その気になって〟(内発的)思い描くことができる能力といってもよいでしょう。彼は、〈寄り添い、分かち合う〉、そのなかで感情と直覚、共感と愛情の交流を成立させることの大切さを示してくれているのでしょう。

子育ての日々の世話や責任が一人の親の肩に集中するとき、虐待は発生しやすくなります。有史以来、今日ほど母親が自分の考えでもって、子育てができる時代はなかったでしょうが、今日ほど子育ての責任が母親の肩に重くのしかかっている時代もなかったでしょう。目一杯の子育てを要求される状況のなか、この重要な役割期待に見合うだけの心理的な励ましは少なく、母親はイライラを爆発させ、緊張に満ちた不安状態に陥っている情況をよくみます。このように複雑な子ども虐待の問題に取り組んで四半世紀を経ましたが、そこには想像力を共有しあえる仲間の存在がつねにありました。もっと、もっと《子どもと母親の世界に気づき、よりそい》ながら、さらに的確に《判断し、つなぎ・結ぶ》想像力・対応力を養いたいと、私たちは話し合っています。

平成21年度 入学式

入学式が平成21年4月1日（水）午前10時から行われました。

当日は四日市市長、四日市市議会副議長、市立四日市病院 院長、市立四日市病院 副看護部長、三重県看護協会 副会長にご臨席いただきました。

河野学長の入学許可宣言に始まり滞りなく終了し、本学3期生となる98名は、次週から始まる修学に向けて決意を新たにしていました。

病院修学金制度説明会 －プロとしての将来を考える－

本学では、毎年、学生が各医療機関の運営する奨学金制度を理解し、奨学金貸与を受ける医療機関を適切に選択できるよう、また、看護職者として将来の進路を考える上での参考としてもらうために各医療機関のご担当者にお集まりいただき個別説明会を開催しています。

去る4月16日（木）学生ホールにおいて開催した「平成21年度修学資金合同説明会」では三重県および臨地実習施設等が参加し、奨学金制度や病院概要についての説明がありました。

当日は、1年生を中心に約60名の学生が参加し、各施設のブースでは真剣な表情で説明を受けている学生の姿が見られました。

教員の声

精神看護学　講師　萩　典子

白衣の重み…

大学が開校し初めて3年生の本格的な領域実習が9月から始まりました。まだ残暑が厳しく朝、病院の更衣室に着くと真っ先にエアコンのスイッチを入れて部屋を涼しくして学生を待っていました。しかし気づくともう11月で私の担当している病院付近の雑木林は色づき冬が間近という感じになりました。

大学での講義では、学生たちは比較的のんびりしていて、厳しい臨地での実習を乗り越えていけるのか心配していました。でもその姿とは全く違い、毎日の白衣姿の学生は凛としていて真剣そのものです。朝から「これ、先生見てください」「先生、昨日こんなふうに考えたのですがどうですか？」と質問の嵐です。また時には患者様のことを考え、現実と理想の中で悩み苦しみ涙する姿もあります。学生の新鮮で高い感性からは、私も多くのことを学び、学生の成長と可能性を感じとても嬉しく思います。実習に来て、今までの学業とは異なり困難さを感じ難渋している学生の姿も見うけられますが、それを乗り越えて大人として看護職として育っていくのだと思い、一人ひとりの学生を支援していければと思っています。学生には悩みや苦しみを感じた時に「助けて」と言うことができる、そして自分の弱さに気づくことができるようになってほしいと思います。

最近、学生が冗談で「先生、先生が年をとったら私がみてあげるからね」という言葉に、頼もしさを感じ「よろしくお願いします」と心から答えています。

安田記念財団の奨学金

快挙！ 全国で5名

平成21年度「安田記念財団」の奨学金（看護学生）に、本学3年生の今村健一郎君が選ばれました。同奨学金は、民間団体である安田記念財団が癌の治療・予防等に対して熱意のある看護師を育成するため、毎年、募集するもので、全国の応募者の中から5名の看護学生に奨学金（30万円）が無償給付されるもので、本学は、一昨年に次ぎ2人目の嬉しい受賞となりました。

受賞学生のコメント　3年　今村　健一郎

1年生の時から応募し続けた安田記念財団奨学金。自分の癌に対する想いを文章で伝える難しさを感じながら、四苦八苦したことを今でも覚えています。

そんな中、行き詰まったときに私の支えとなってくれたのは、癌に体を蝕まれながらも私を看護の道に導いてくれた祖母と、看護学実習で命の力強さを教えてくれた患者様の姿でした。今後も、この気持ちを胸に抱き、熱い心で前に進んでいきたいと思います。

教育後援会役員会・総会

6月13日(土)、本学キャンパス内の第一会議室において、平成21年度教育後援会総会が開催されました。

当日は、役員、顧問を含め30名弱という少し小規模な会議となりましたが、浅尾副会長のご挨拶で始まり、昨年度の事業報告および決算報告、役員の選出、平成21年度の事業計画および予算案について審議され、すべて承認をいただきました。

また、質疑応答の時間を設け、参加された保護者の方々から質問をあげていただきました。やはり授業、実習に関する質問が多いようで、教育後援会顧問である学長、副学長、学科長より直接ご回答させていただく形を採りまして、質問された方々にはご納得いただけたのではないかと思います。その他にもさまざまな意見交換がなされ、内容の充実した有意義な会になりました。

大学との懸け橋

保護者懇談会

今年度で第3回目となる教育後援会主催の「保護者懇談会」が、10月3日(土)に本学内で開催されました。

午前の全体会では、河野学長より本学の教育理念等の説明があり、続いて宮﨑学科長より学生生活全般についてお話がありました。その後会場を学生食堂に移し、昼食を兼ねての懇親会が行われ、保護者と教員、あるいは保護者同士が和やかな雰囲気の中、活発に交流する場面が見受けられました。

午後の部では、今年度から始められたアドバイザー制度の担当教員による個別面談が行われました。アドバイザー制度とは、セミナーとは関係なく、学生を10名程度の少人数グループに分け、担当する教員が学生生活全般をきめ細かくサポートする本学独自の制度で、個人面談では、学生の現状をよく把握している教員から、学業を含めた現状や今後のアドバイスなどを聞くことができたようです。

今後も保護者の方々にとって有益な情報を提供できる保護者懇談会にしていきたいものです。

オープンキャンパス
Open Campus

平成21年度のオープンキャンパスを7月19日(日)、8月22日(土)、9月26日(土)に実施いたしました。

参加者数は合計で419名という状況で、特に夏休みは高校生が参加しやすい時期でもあり、昨年以上に盛況な開催となり、滞りなく終了することができました。

参加状況から、高校生の約7割が3年生で、保護者やご家族と一緒に参加され、夏休みから、進路について真剣に考えている方が多数だったことが印象的です。地域別でみていくと、三重県が74%、愛知県が16%、その他に岐阜県、静岡県の順に東海地区の参加が多いですが、今回は沖縄県からの参加もいて、全国から本学への関心や期待をもっていただく良い機会になったかと思います。

実施内容として、全体説明より学長挨拶をはじめ、四日市市健康部長や四日市市保健所長から公私協力方式や大学支援の説明や大学案内・入試概要の説明も行いました。午後からは、学食でバイキング形式でのランチ体験を用意し、模擬講義や体験実習、施設見学など自由に参加できるようにしました。学生ホールに設けた相談コーナーでは、学生生活や入試、奨学金制度についての相談が多く、対応した教職員や学生スタッフの説明に熱心に耳を傾けていました。

また、教職員を中心に、学生スタッフの皆さんも本当に頑張っていただきました。親切で丁寧に対応する教職員や先輩たちの姿をみて、本学に入学して一緒に勉強したいと感じる方も多かったかと思います。アンケートの意見から、大学全体の明るさ、施設設備の新しさなど教育環境の充実を感じたことや模擬授業や看護体験実習を通じて、看護学の大切さを学習できたことに対して、看護職へのあこがれや将来への期待をもつ気持ちを抱いていただいたかと思います。

この意見を参考に、来年度も充実したオープンキャンパスを開催できるよう努力していきたいと思います。

入試広報室

職員研修会

FD（ファカルティ ディベロップメント）(Faculty Development)
―教員の教育力向上を目指して―

FDとは：教員が授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取り組みの総称

〈FDワークショップ〉委員長として

学長・FD委員会委員長　河野　啓子

平成19年4月に開学した本大学は、本年4月に3回生を迎えました。年ごとに賑やかさを増し、活気を呈していますが、入学してくる学生の学力レベルも多様化し、すべての学生にそれぞれの学力を伸ばしてもらうためには、かなりの教育力が必要とされています。

そのため、本大学ではFD活動に力を注ぎ、外部講師を招いての講演会や教員全員参加のワークショップを行い、教員の教育力向上を目指しての努力を重ねています。ワークショップの運営を例にとれば、第1回はFD委員会のみで行いましたが、本年度開催の第2回は教務委員会とのジョイントで実施し、次回は学生委員会とのジョイントでの開催を予定するなど、その効果を高めるための工夫をしています。

本年度の研修会は「授業評価の現状と課題」をテーマとし、8月31日に実施しました。午前中は名古屋大学高等教育研究センターの近田政博准教授による講演、午後は午前中の講演をふまえ、三つのグループに分かれての討議、その後の全体討議を行いましたが、それぞれの教員が自分の授業改善について考えるよい機会になったと考えます。

〈FD委員報告〉授業評価の課題と今後の展望

母性看護学　准教授　牛之濱　久代

本学では授業改善のための手段として授業評価を実施し、その結果を活用して教育の充実を図っています。今年度第1回目のFD研修会では「授業評価」をテーマに名古屋大学高等教育研究センターの近田政博先生をお招きし、『日本の大学における授業評価に関する議論』についてご講演いただき、望ましい授業評価に関して理解を深め、さらに教員によるワークショップで現行の授業評価の課題や今後の展望について話し合いました。授業評価は、「高等教育の場においては教える者と学ぶ者の間に上下関係・権力関係がない」「相互に敬意を払う」「相互に高めあう努力をする」という考え方が基盤にあります。授業改善は教員だけの努力でできるものではありません。この度の研修はそのことを改めて認識する契機となり、現状の課題の明確化と解決案を提示することができました。効果的な授業評価を実施することにより、教員はよりわかりやすい授業を展開すること、学生は学習者としての自覚を高めることができます。今後も互いに相手を尊重し、学びあう姿勢を持つことで、一層充実した教育ができるよう精励したいと思います。

個人情報保護研修会

個人情報管理の徹底

図書館長・個人情報保護委員会委員長　山崎　正人

今年度の個人情報保護研修会は、新任の教職員も多いことから5月27日と早期に実施しました。委員会は、個人情報保護とは、個人の人格を尊重し個人の情報開示の意志を重視することが基本であるとし、OECDの8原則に立ち返って考えることが重要で、個人情報保護の法律・ガイドライン・その他の規則についての説明も行いました。

次いで、出席者全員による意見交換が行われ、新任の教職員を含めて本学の個人情報保護についてのルールを確認すると共に、日頃疑問に思っていることを含め、忌憚のない交換を行いました。

内容としては、看護大学という本学の特性を踏まえ、大学＝教員が持つ、個人情報を含む記録等について、定期試験答案等の学内で完結するものと、臨地実習記録等の学外の諸機関・個人が関係する書類とに分けて考えることが確認され、前者は個人情報保護委員会が扱い、後者については、実習記録の取扱などに関する本学の規程を教職員間で再確認することができました。

学友会

新入生歓迎会
四看大へようこそ！

春の風が心地よい4月3日(金)午後、学友会主催による新入生歓迎会が学生食堂にて開催されました。

入学式では少々緊張気味の新入生でしたが、学長をはじめ教職員から歓迎の言葉や先輩学生からクラブ・サークルの紹介・勧誘や趣向を凝らしたゲームなどで親睦を深めあい、徐々に表情も和らぎ、賑わいをみせていました。

新入生の初々しい表情とは対照的に、本会を企画運営し、その役割を見事に果たした2・3年生らの真剣で凛々しい姿に1年間の成長ぶりも垣間見ることができました。

臨地実習いよいよ本格化
～2年半の集大成～

1年次の基礎科目であるリベラルアーツの土台の上に、主に2年次における基礎専門科目を積み上げ、3年次前期の専門科目を中心に演習を含めての段階が終了し、1、2年次の地域看護学実習及び基礎看護学実習で培ってきた基礎的技術を活用して対象との人間関係の成立の援助技術修得を終了しての集大成とも言える専門領域での実践を展開する段階に至りました。

実習開始に当たり、6月17日臨地実習を担当していただく各施設責任者等35施設65名の方々のご出席のもと『臨地実習説明・懇談会』を開催し、大学の教育方針・臨地実習の取り組み等についての共通理解をしていただく機会といたしました。

現在第1回生128名の各領域臨地実習が9月7日より開始されております。創立前からの緻密な準備の元に臨地実習施設の確保と調整、実習指導教員の補充、実習要項等の書類の整備、実習用物品、その他諸々の準備を終えて、待ちに待ったというか成人・小児・母性・老年・精神・地域看護学実習として22グループ、24週、平成22年7月2日までの長丁場の学修段階に入りました。

教育後援会よりのご援助に感謝すると同時にご支援よろしくお願いいたします。

臨地実習施設の皆様の多大なるご支援とご協力をお願いいたします。皆様、どうか学生の成長を温かく見守ってください。

学科長・学生支援センター長・実習委員長
宮﨑　徳子

クローズアップ実習「成人看護学」

成人看護学実習は専門科目の生涯領域に対応する実習科目です。人生の充実期にある人々の健康障害に対する反応に注目しながら援助方法を決定し、課題達成に向けて看護行為を実践します。

成人の健康問題の多くは生活習慣病です。生活習慣病の発症と重症化を予防することが成人期の早世を予防し、老年期の寝たきりの予防や健康寿命の延伸に寄与します。そこで、人々が自らの健康をコントロールし、改善することができるようにヘルスプロモーションの考え方を基盤に患者・家族のセルフマネジメントの獲得を支援します。ところが、慣れ親しんだ生活習慣を変えることは容易ではなく、病状が進行すれば重篤な合併症が起こります。急激な生命機能の低下を引き起こす場合は生命の揺らぎを最小限にとどめる援助が必要です。また、完全に元の健康状態へ戻れる場合とそうでない場合があります。その際は個人の生活の編みなおしを支援します。また、いかなる治療が行われても死を避けることができない場合は、苦痛症状からの解放や精神的な安寧を目指します。

学生は、このような看護援助が必要な成人の患者さんを受け持ち看護援助を体験します。成人看護学実習期間は8週間に及びますが、学生はその間に目覚ましい成長を遂げていきます。例えば情報の分析や解釈、そして問題や課題の見極めが鋭くなります。社会的に重要な役割を持ち療養生活を継続される方に何ができるかを自問する真摯な態度が自ら学ぶ意欲と状況の変化に主体的に対応していく自己教育力を育てます。私たちが目指す学生の到達目標はこれまでに蓄積した看護実践の総合的な能力を活用し問題や課題に取り組み、新たな課題を産出することです。成人看護学の教員は実習病院の関係各位の多大なご支援を賜り学生の学修を導いてまいります。皆様より一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

成人看護学　准教授
岩本　淳子

現場リポート「精神看護学実習」

精神看護学実習では、実習病院で入院している患者様の治療や看護について学習します。実習が始まり患者様と関わっていく中で学生は、「はじめは精神科という言葉に良いイメージがなかったが、病気が精神疾患であるというだけで、今までみてきた患者さんとかわらない」と気付きはじめ、日常生活の援助だけでなく、作業療法や散歩、ゲートボール大会などに一緒に参加し、たくさんの患者様とコミュニケーションをとっていくことで、充実した実習を送ることができていました。患者様と一緒になって、考えたり、笑ったり、ともに喜びを分かち合えるのは、精神看護学実習の特徴だといえます。この実習を通して、患者様に関心を持ち続けていくことが、看護にとっていかに重要であるか学ぶことができた実習でした。

精神看護学　助教
大西　信行

患者様と学生が
一緒に作った作成物

実習病院
- 大仲さつき病院
- 久居病院
- 鈴鹿厚生病院

実習体験記

小児看護学実習 ー重症心身障害児の患者さんを受け持ってー

3年　小林　可奈

今回の小児看護学実習では、言語的コミュニケーションができない重症心身障害児の患者さんを受け持ちました。はじめは、重症心身障害児についてイメージがつかず不安でいっぱいでしたが、援助を通じて関わっていくうちに、看護者側がいかにすばやく患者さんのサインに気づくことができるかできないかによってその方のQOLが大きく左右されてしまうことがわかりました。また、病院が生活の場となる患者さんたちに安心して過ごしてもらうためには、看護者の観察力と的確な判断が重要であることを理解することができました。この実習で得たことを次の実習でも生かしていきたいと思います。

母性看護学実習 ー初めての分娩見学ー

3年　舟戸　萌

私にとって母性看護学実習は毎日新しいことにチャレンジでき、すごく充実した実習でした。いろんなことを体験させてもらいましたが、やはりその中でも一番印象的だったのが分娩の見学です。初めての体験で、あたふたしてばかりでしたが、産婦さんと助産師、そして医師が一体となり、出産という目標に向かうその場の雰囲気を感じることが出来ました。この体験は自分がいつかはお産をする時のことも改めて考える機会になりました。実習中は、褥婦さんと赤ちゃんの2人の人を同時に受け持たせてもらい、大変だったけれど、褥婦さんの励ましや赤ちゃんの可愛さに、毎日元気をもらえました。こうして振り返ってみると、とても良い実習でした。この実習を励みにこれからも頑張っていきたいです。

教員の図書紹介
「産業看護実践マニュアル ― 明日に生かせる活動のヒント」

河野　啓子監修、(株)メディカ出版、2008

サービス経済化の進行、高度情報化、国際化など、社会経済の変化は、雇用や就業形態ならびに作業態様の急速な変化をもたらし、働く人々の心身の健康はおかされやすくなっています。そのため、産業看護職への期待が年ごとに高まりをみせていますが、その期待に応えるために不可欠な産業看護技術を向上させるための参考書として編纂したのが本書です。内容は7章から成り、文章の書き方、ケースワーク、グループワーク、コミュニケーション技術、保健相談面接技術、コーディネーション技術、情報管理技術など、多岐にわたっています。

※本学図書館にて閲覧できます。

看護×語学＋仲間＝海外研修

研 修 先：米国カリフォルニア州立大学ロングビーチ校
研修期間：8月1日～8月24日
研修対象：2年生26名
研修内容：語学および看護学の研修

昨年3月、本学は米国カリフォルニア州立大学ロングビーチ校（USLB）との間に「学術交流に関する協定」を締結しました。この協定に基づき、今年度もUSLBにおいて「第2回海外研修」を実施しました。

今年は、新型インフルエンザが世界的に流行していたこともあり、国際交流委員会において実施の是非について慎重に検討を重ねましたが、新型インフルエンザが弱毒性であることや学生達に海外研修参加への強い意欲があることなども考慮し、最終的には予定通り実施することを決定しました。

今回の研修には、青野教授、高橋助教引率のもと2年生26名が参加し、語学研修に加えて病院等の施設見学などを行う看護研修を盛り込んだ3週間（8月1日～8月24日）の特別プログラムに取り組みました。語学修得だけでなく、米国における看護の実際にふれる中で日本の看護を改めて考えるいった国内では体験できない貴重な学びを得ることができたのではないかと思われます。

研修を終えた参加者26名は、様々な学びや貴重な体験を胸に、8月24日無事帰国しました。心配されていたインフルエンザ感染などの大きな病気や事故などに遭うことも無く、国際交流委員会としても実施を決定したことを本当に良かったと安堵しました。

海外研修は、国内では体験できない貴重な学びを得る絶好の機会にもなります。国際交流委員会では、そういった意欲に燃える学生達を今後も積極的に支援していきたいと考えています。

国際交流委員会

現場リポート　海外研修に引率して

地域看護学　助教　高橋　悦子

3週間の研修中は、英語のレクチャーだけでなく、看護に関連する講義やロングビーチ市内の病院・施設の見学も設定されており、日本との保健・医療システムやさまざまな施設設備の違いに驚いたり、また、看護として共通の大切なものに気づいたりと、多くの学びを得られたことと思います。さまざまな Activityに対して、前向きにそして元気にチャレンジする学生の皆さんの姿は、時に頼もしく思える場面も多くありました。文化・生活スタイルの違う米国での異文化体験は、今後の皆さんの看護にも必ず役立つことでしょう。

研修に参加された学生の皆さんの成長を間近で感じられたことは、大変嬉しいことでした。今後もこのような研修に、より多くの学生の皆さんが参加できることを期待します。

海外研修体験記

Gestureで乗り切った3日間

2年　葛谷　直樹

まず、私はこの海外研修に参加できたことに誇りを感じています。行く前は不安と緊張でいっぱいでした。海外研修に一緒に行くメンバーも5月くらいには決まり、一緒に海外に行くための事前講義をこなしていきました。講義を重ねていくなかで、今まで話したことのなかった友達とも仲良くなれ、それまで感じていた不安や緊張はなくなっていきました。

アメリカに到着してからは、楽しいこと、初めて知ることなど、驚きや発見の連続でした。最初の3日間のホームステイは言葉の壁にぶつかり、何度もジェスチャーで乗りきりました。ホームステイ先の家族は大変優しく、私のジェスチャーをよく理解してくれ、いろんな場所に案内してくれました。みんなで過ごした寮生活や海外生活、大学の先生方の優しさ、道行く人みんなが挨拶をしてくれた感動、病院や老人ホームの充実した設備、そしていろんな人との出会いなど、この研修を通して得たものは多く、一生忘れることのない思い出となりました。

海外研修体験記

Dormitoryで生まれた団結力

2年　寺前　さやか

この研修は、語学はもちろん、文化や医療制度など多くの日本との違いを体験し、自分なりに成長できた3週間でした。

ホームステイの3日間では、アメリカのありのままの生活を体験できました。初めは思うことを上手く伝えられず、相手が言っていることもよくわかりませんでした。でも、簡単な単語を繰り返し、ジェスチャーを交えながら伝えることで、コミュニケーションがとれ、徐々に英語にも慣れることが出来ました。

施設見学で、アメリカでは看護師の地位は高く、日本では行わない医療行為もアメリカでは行うと知って驚きました。また、アメリカの看護教育は、シミュレーションを重視しており、日本でも取り入れられるといいなと感じました。

ドーミトリーでの生活は、初めは不安もありました。しかし、毎日一緒に行動していると、団結力が生まれ、集団生活の難しさや楽しさ、大切さを学びました。

ここで得た知識や貴重な経験は、将来医療従事者として働いていくときにも役に立つと思います。

社会貢献活動 －地域に根ざし、社会に貢献－

2009 6.20 公開講座

『子ども虐待に関係職種はどう向かうか』

平成21年6月20日（土）じばさん三重2F研修室にて、平成21年度 四日市看護医療大学公開講座『子ども虐待に関係職種はどう向かうか～子どもと家族の力になるために，なれるために～』を開催しました。

前半は、公立大学法人大阪府立大学 看護学部の上野 昌江教授が「子ども虐待における保健師の役割と母親への支援の方法」を、後半は、本学の鈴木 敦子教授が「虐待を受けた子どもへの治療的ケア」について、それぞれ講演を行いました。

当日は今回のテーマに関係する職種の方々を中心に多数ご参加をいただき、講演終了後の質疑応答では熱心に質問をされる参加者もみえました。

主催：四日市看護医療大学

2009 7.5 みえアカデミックセミナー2009

『2時間でわかる少子・高齢化、人口減少社会』

平成21年7月5日（日）三重県生涯学習センター2F視聴覚室にて、「みえアカデミックセミナー2009」の公開セミナーを開催しました。

「みえアカデミックセミナー2009」は、三重県内の高等教育機関と三重県生涯学習センターが主催し、「心豊かな人生へのアクセス」という全体テーマのもと、各校が1日ずつ公開セミナーを担当するというものです。

今年で2回目となる今回は、東川　薫准教授が「2時間でわかる少子・高齢化、人口減少社会」という演題で講演を行いました。現在、誰しもが不安に感じている、わが国の少子・高齢化、人口減少社会について、分かりやすく説明をし、参加者の皆様も熱心に耳を傾けていました。

主催：三重県内高等教育機関、三重県生涯学習センター

2009 10.18 地域の知の拠点シンポジウム

『ストレス解消に役立つ〝笑い力〟を高めよう』

平成21年10月18日（日）じばさん三重4F視聴覚室にて、第6回地域の知の拠点シンポジウム「ストレス解消に役立つ〝笑い力〟を高めよう」を開催しました。

働く人々のストレス解消の効果的な方法のひとつとして、近年、注目を集めている〝笑い力〟を高める方法を働く人びとに修得していただくことを目的に、その分野の専門家であるいやさかネットワーク代表のジェイ神原氏に講演をお願いしました。

講演の合間に行われる笑い力体操などの実技で身体を動かした参加者の顔は自然と笑顔になっていました。講演終了後は、本学の近藤信子教授が「笑いの効用」をテーマにシンポジウムの総括をしました。

主催：四日市看護医療大学、四日市地域研究機構産業看護研究センター
後援：三重県、四日市市

ご多忙の中、ご参加をいただきました皆様には心より御礼申し上げます。

第3回大学祭 よんよん祭

10月24日（土）▶25日（日）

テーマ「はじめの一歩」
～みなさんWelcomeですから～

今回の大学祭は、初めて、隣接する四日市大学との合同開催となり、「よんよん祭」と名付けられました。今年のテーマは「はじめの一歩」～みなさんWelcomeですから～とし、初めての合同開催への期待をテーマに込めました。両大学が別々に実施していた時と比べると、一つのテーマのもと、両大学のキャンパスを目いっぱい使った大学祭は非常にダイナミックで、盛り上がりも大きかったのではないかと思います。両大学がそれぞれのカラーを出し、それがうまくミックスされた大学祭でした。

合同ならではの盛り上がり!

今年の大学祭は昨年と違い四日市大学と合同で行いました。合同で行ったことにより、昨年の大学祭とは異なった楽しさを味わうことができました。

本学の設備だけではやはり行うことに制限があるので、合同で行ったことは成功だったと思います。しかし、大学内の準備にかなり時間がかかってしまい、当日までに完成するか不安でしたがみんなで協力してとても良い催しを作ることができました。大学祭準備から当日まで1年生と2年生が協力して大学がひとつになっていくように感じました。来年は、実習でできないかもしれないけれど、大学の歴史の土台を作ることができて良かったです。

2年生（大学祭実行委員）
鈴木　哲也

ハロウィンダンス大好評!

2日間にわたる大学祭も無事終えることができました。ご協力頂きました地域の方々をはじめ、保護者の方々、先生方には心より御礼申し上げます。実行委員長という大役を頂きましたものの、各委員や有志の皆さんの協力がなければ、今のこの充実感を味わうことはありませんでした。中でも、短期間で準備・練習に励んだハロウィンダンスが、ご来場頂いた多くの方々に好評頂けたことは何より嬉しく、仲間への感謝の気持ちに胸が熱くなりました。至らない点も多々あったこととは思いますが、今回の経験を生かして、来年の2年生には更に良い大学祭を開催して頂きたいと思います。

2年生（大学祭実行委員長）
別府　真衣

四日市看護医療大学学報 No.3 [発行日]2009年12月20日 [発行]四日市看護医療大学 庶務課 〒512-8045 三重県四日市市富生町1200 TEL.059-340-0700 FAX.059-361-1401 http://www.y-nm.ac.jp/

平成21年度
学生公認団体クラブ
五十音順

文化会系
- ENGLISH CLUB
- 家庭科部
- 軽音学部
- 吹奏楽部
- ボランティアサークル
- Lape☆Lape（アカペラ）

体育会系
- 硬式テニス部
- ゴルフサークル
- ジャズダンス部
- 卓球クラブ
- バドミントン部
- バトン部
- バレーボール部
- フットサルサークル
- 陸上球技部

クラブ紹介

家庭科部 hand-in-hand

手作り小物の出張販売

私たち家庭科部は、一人暮らしをしたときに、生活に困らないような必要最低限の能力を身につけることを目標に活動しています。今年度の大学祭では、実習で多忙な先輩方の助言や協力を得て、1年生が中心となり、準備から当日の運営までを行いました。準備に取り掛かるのが遅く、前日もみんなで校内に残り、商品である手作りの小物を制作していました。当日は仕上がった商品を模擬店に並べるだけでなく、かごを提げて会場内で出張販売しました。たくさんの方と触れあうことができ、初めて買っていただけたときはとても感動しました。

今後の活動として、カロリー計算をした料理や、治療食の制作・試食をすることにより、患者さんの日常生活を知り、その人に合った看護を深く考える機会にしたいと思っています。

家庭科部としても看護学生としても、まだまだ未熟な私たちですが、この活動が将来現場で働くときに少しでも役に立てばいいなと思います。発表の場がないのが残念ですが、私たちの活動を見守っていただけると嬉しいです。

バトン部

笑顔がモットー

私たちバトン部は昨年、経験者2人で創設しました。現在は2年生5人、1年生2人でみんな仲良く、元気に明るく活動しています。今年は初めて大学祭にも出演し、バトンはもちろん、ポンポンの演技も披露しました。未経験者はゼロからのスタートということもあり、始めはなかなか思うような形になりませんでしたが、日々練習や努力を重ねることで、たくさんの技を習得することができました。そして、みんなでひとつの演技を作りあげることで、チームワークを深めることができました。

バトン部は、技術の向上だけでなく、「笑顔」を大切に考え、少しでもたくさんの人に楽しんでもらえるように活動しています。これからは、活動の幅を広げ、バトンを通してたくさんの人と触れ合い、笑顔をつなげていきたいです。笑顔をモットーに、様々な人に元気を与えたいと思いますので、応援よろしくお願いします。

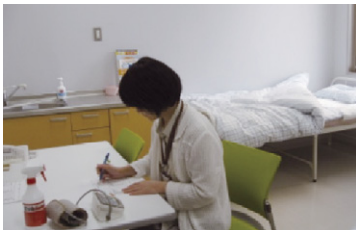
スクールカラーは なぜ、オレンジ？

オレンジ色は充実感、エネルギーを呼び起こす色といわれ、また新しいことを予感させる色、好奇心をそそる性質をもつとされています。
産業都市の活気、教育研究への情熱、人間の本質への好奇心をイメージさせることが本学にふさわしいとして、スクールカラーに決められたという経緯があります。

保健室だより

インフルエンザ撃退！

新型インフルエンザが流行しています。本学でもうがい、手洗いの徹底、公共交通機関内でのマスク着用を呼び掛けています。周知のとおり、感染予防には身体の免疫力を高めることも大切です。栄養バランスの良い食事摂取、適度な運動、リズムのとれた生活、十分な睡眠の確保、ストレスを解消し精神的安定を図ることに努め、免疫力を高めたいものです。



従来の季節性インフルエンザワクチンも今年は不足しており、本学では例年全学年を対象にインフルエンザ予防接種を実施していますが、今年は数不足のため、臨地実習中の3年生のみに10月23日に季節性インフルエンザ予防接種を実施しました。南半球ではA香港型インフルエンザが流行しており、新型インフルエンザよりA香港型インフルエンザの方が重症化しやすいという情報もあります。新型も季節性も感染予防策は共通です。日々の心がけでインフルエンザを撃退しましょう。